

平成25年度

地域で決める学校予算事業第2回評価会議 会議録

平成25年12月5日 会議

地域教育課

平成25年度 地域で決める学校予算事業第2回評価会議 会議録

開催日時	平成25年12月5日(木) 10時～11時25分
開催場所	奈良市役所 北棟5階 第21会議室
内 容	<p>○ 開 会</p> <p>1 学校教育部長挨拶</p> <p>2 平成26年度の事業評価について</p> <p>3 4年間の事業総括について</p> <p>4 その他</p> <p>○ 閉会</p>
出席者(委員) (事務局)	<p>加藤久雄委員長 石川 陽副委員長 岡田龍樹委員 瀬渡章子委員 中川直子委員</p> <p>北 学校教育部長 梅田学校教育課長 石原教育政策課長 松本教育支援課長 松田地域教育課長(庶務) 地域教育課から5名</p>
開催形態	公開
担当課	地域教育課

議 事 お よ び 協 議 内 容

○ 開会

1 学校教育部長挨拶

平素は、奈良市の教育行政にご理解とご支援を賜り、感謝申し上げます。

本日は、ご多用のところ、委員の皆様には第2回評価会議にご出席を賜り、お礼申し上げます。

さて、平成25年度「地域で決める学校予算事業」も2学期に入り、各地域教育協議会を中心に、中学校区によるイベント事業や、各学校園での学習支援や環境整備など、地域と学校が連携・協働した様々な取組を実施していただいております。

また、10月から担当係が学校園に出向き、「地域で決める学校予算事業」の執行状況調査を行っているところです。この調査では、各地域教育協議会会長と総合コーディネーターにも出席いただき、事業の全般について意見交換をさせていただいております。

この後、担当から本日の議案について説明と提案をさせていただきます。限られた時間ではございますが、ご審議いただききたんのないご意見やご指導を賜ればと思っております、どうぞよろしく願いいたします。

今後とも本市の事業の推進にご協力を賜りますようお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。

(加藤委員長による確認)

会議の公開、写真撮影・録音の了解

会議録の署名委員は、加藤委員長と瀬渡委員

傍聴者なし

◎議事

2 平成26年度の事業評価について（プレゼンテーションを含む。）

- ・事務局説明（資料①②③④⑤⑥）

加藤委員長： ありがとうございます。資料①ではこれまでの経緯、資料②③④では着々と中身が充実してきているということが数値的にも見て取れること、また、プレゼンテーションへの協議会関係者の出席も増え、成果と高まりが出てきているという説明でした。ご意見をお伺いしたいのは、資料⑤に関わってです。プレゼンテーションに関わって、項目が1から5の項目、重点的な取組を中心にして5分間の説明を受け聞き取りを行うという提案でしたが、資料⑤辺りでご意見を伺いたい。

変えることに反対ではないのだが、経年的評価は変えるとしにくくなるということがあり、痛しかゆしだがどうか。

石川副委員長： 評価の観点に関しては当初から議論はあったが、委員長からも指摘があったように、変えることによるデメリットがある中で、それでも変えるべきかということだ。項目を変えているだけで観点は変えていない。観点を変えるのであれば根本的に変えるということになるが、項目を変えただけ、いわば分類を変えただけだ。だとすれば変える必要はない。

加藤委員長： それは例えばどんなところか。

石川副委員長： 例えば、昨年度までの③「支援人材」の「役割」が、本年度では、④「連携と支援」の「役割・協力」に移動しているだけだ。抜本的に評価を見直ししているのではない。言い方が悪いですが、小手先だけで変えるのであれば経年的評価を重視して変えるべきではない。もう一つは、そもそもプレゼンテーションは、計画性を重視して実施してきた。今回新しく大きな項目として起こした「テーマ」だが、地域でどんな教育をするかというテーマ性に関しては、地域に住んでいない我々には評価しようがない。しかし、計画書としてそのテーマに沿って細かいプランが立てられているかどうかは評価できる。予算を要求するに足りうる計画性があるかどうかということで、プレゼンテーションを始めている。地域にあった教育をしているかどうかは地域が自己評価すべきことだ。テーマを評価するということは、その地域の教育を評価することになり、プレゼンテーションの本来の目的からずれてくる。テーマを大きな項目にすべきではない。

岡田委員： 変更する理由として説明があったのは、書類と評価基準がずれているから合わそうということでしたが、作成する書類は、過去も今も新しい評価基準のようになっているのか。

事務局： 大きくは変えていないが、本年度の試算・試案では、「地域連携」と「支援人材のあり方」を一つの項目にまとめた。また、昨年度は、テーマがあってそれに基づく取組内容だったが、特色ある取組、重点的な取組が見えにくいので、その表記を「重点的な取組」というように変えた。

石川副委員長： 計画書は分かるが、評価の観点を変えた理由をもう一度説明してほしい。

事務局： 事業計画書の評価いただいたときに、古い方の5つの評価項目を読み取るのが難しいというご意見をいただきましたので、評価項目を読み取りやすいように変えさせていただきます。

石川副委員長： その話題、経緯は記憶にはあるが、評価のやり方が難しいからという理由で変えていいのかという気がする。

瀬渡委員： 確か計画書の中で、重なっている部分があるということだった。例えば、「地域連携」の中で「連携のあり方」とあるが、支援人材の中でも連携が出てくるとか、その辺りのところを整理されたのかなと思う。項目を見るだけで観点が比較的分かりやすくなるというための整理だと私は理解した。3年間このようにグラフ化して経年的変化を見てこられたのだが、これを続けるか、それとも、3年間見てきたので、計画書を分かりやすく修正するなどして新たに仕切り直して更に3年間取り組むということにするか、の選択ということか。

石川副委員長： プレゼンの是非とも関連するので、お聞きしたいのだが、プレゼンを継続すべきかどうかに関しては、プレゼンをやめた方がいいという意見が出ているからなのか、あるいは、1日拘束されてしまう我々の負担を考えてのことなのか。

事務局： プレゼンの内容も含めて、みんな同じような内容になってきているということが一つと、同じやり方でやっていくことがどうなのか、もちろん拘束時間もそうだが、聞いている内容がそう変わらないのであれば、また新たなプレゼンのあり方もご意

見をお伺いして、新たな4年間の評価のあり方を考えていけたらと考えています。

石川副委員長： 評価の項目を変えていくことも、プレゼンの是非についても、われわれの手間はかかるのだが、それだけの理由で変更することは望ましくない。過去3年間の経年的な経過等を見てしまうと、その前は評価項目と合っていない等の意見はあったのだが、やはり、同じ評価基準で継続的に経緯を見ることができの方が望ましいのではないかと思う。3年間を節目として評価しなければならないというのは、地域で決める学校予算事業のことであって、評価やプレゼンのことではない。また、こう変えたからといって我々の評価作業が楽になるかということ、決してそうではない。理念やテーマとして書かれたものを、何でどう評価するかということ、やはりお金と人をどう配置するかだ。「連携のあり方」等、時には複数の項目を見ながら、評価していかなければならないときもある。

加藤委員長： 進めましょう。資料の⑤のフレームの方が分かりやすいということだが、3年間やってきて、ほぼ右肩上がりになってきている。ここで3年でいったん区切りを閉じて、項目や観点の整理の仕方のフレームを変えてみよう和我々が考えるか否かということだ。変えなくてもいいという意見が披露されたが、他の委員の方どうでしょうか。項目は変わったが、観点は変わっていないということの確認からすると、①の「地域連携」は、④の「連携と支援」にまとめられ、②の「学校の姿」というのは、どこに入っていますかね。③「支援人材」の「役割」「実現性」というのは、④に入っていますね。④のプランは、③の計画性ですね。今まであった観点がなくなったり、なかった観点が入ったりということはなさそうですね。

石川副委員長： 「課題の反映」がなくなっている。「解決方法」もなくなっている。

加藤委員長： どうでしょうか。3年区切りで変えましょうかということも可能です。

中川委員 初めてのなので比較はできないのですが、今までやってきて整理した方がやりやすいのではという提起であれば、変えてもよいのではないかという感覚はある。委員が全員同じであれば、比較していくために同じでもいいが、委員が変わると評価の観点や基準も変わるので、少しでも変えていく必要もあるのではないかと思う。

石川副委員長： 変えてはいきたいのですが、これくらいの変更であれば変えないほうがいいと思える。奈良市には、この事業を続けるに当たっての、5年後10年後の到達目標を示していただきたいと求めているのだが、この2年間回答をいただいていない。小手先だけの変更が終わっている。コーディネーターはこの間飛躍的に成長している。プレゼンが同じように見えるのは、彼らのレベルが2年目から上がったからだ。プレゼンに変化がない、おもしろくないと思っているのであれば大きな間違いだ。短い時間で非常に成長したからで、奈良市は先を示さなければならないのに、後を追いかけているような気がする。④「プラン」の「特色」が評価の観点からなくなっているのはなぜか。評価するのは大変だと言ってきたのですが、どうしたものかと思っている。

加藤委員長： 今後奈良市としてこの事業をどうしていくかはこの事業全体のことで、テーブルを別にしましょう。目指しているものは何だということに関しては、大事な議論ですが、単年度として進んでいますので、単年度のこととして考えたときに、

評価の枠組みで、大きなものが漏れていない、ということであるならば、継続性も大事かもしれないですが、4年目ということで整理し直してもよいのではないかとというのが私の個人的意見です。テーマ設定の妥当性ということですが、「テーマ設定が明確に示されている」ということは、確かに地域に住んでいないわれわれには判断はしにくいですが、計画の中できちんと把握されているかどうかを見るのであるならば、この内容で成り立つと考えます。この事業が地域として、奈良市として、何を目指し、考えていくかは、一度、フリートークする議題としてあげてもらいましょう。大事なものが抜け落ちているのでなければ変えてもいいのではないかと。

石川副委員長： 「学校の姿」の「課題の反映」と「解決方法」がなくなっている。これは今まで重視してきたことだ。新しい観点のどこに反映されているのか。「取組の重点」は彼らの一番やりたいことになるので、例えば花壇の整備と充実とかが上がってくると、今の学校の課題をどう考え、どう解決しようとするかが見えなくなってしまう。

岡田委員： ①「課題と分析」で課題を把握し、現状分析をして、目指す子ども像を考えて、これを前提として、②どういうテーマで何をしていくかということで、全てが解決方法になっているということですよ。

石川副委員長： ただ大事なことは、学校の課題が抜けている。課題というのは地域全体の課題となり、例えば若者がおらず高齢者ばかりだという課題になり、地域と学校の関係、学校の課題が見えてこない。

岡田委員： 高齢者ばかりというのが課題だとされるなら、それはちょっと違う。学校の課題も地域の課題もそんなに区分けはできない。だから学校と地域が連携していきましょう。そこをどう認識しているかをこちらとしては聞いてディスカッションして、両方の共通の課題を解決していくテーマや事業内容を設置してくださいということになる。

石川副委員長： 地域の計画書には地域の課題、学校の計画書には学校の課題が書いてある。毎年カットアンドペーストしてくるところも減らないので、地域の課題と学校の課題の関係をプレゼンで聞いていきたいので、学校の項目が抜けてしまうのはどうか。

加藤委員長： 修正していこう。資料⑤の①の「課題と分析」の項目の「課題把握」に、「学校の姿」の「子ども像」や「課題の解決」という把握がなされているかどうかを入れませんか。

石川副委員長： 「課題の把握」と「課題の反映と解決」は違う。

加藤委員長： 「課題の反映」とはどういうことか。

石川副委員長： 地域にはこういう課題がある、それが学校の子どもの姿にこういう影響が出てきている、という文章が、きちんと分けて書いてあるということだ。こういう現状の中で、学校の中でこういうことをしていきますと示してほしい。

加藤委員長： その書きぶりで、反映ということも入れて、①の「課題と分析」の中に落ちませんか。子ども像を捉え、反映ということも見て、課題をどう捉えているかということで、①に入れることは無理でしょうか。無理ならば、⑥で項目を起す方法もある。それも無理であるならば、元のままでいくという方法もある。大きな変更はないようだが、②の「学校の姿」が、新しい案ではどこに残っているのか。大体入っ

ているようだがどうか。

石川副委員長： 大方入っています。気になっているのは、学校の姿が抜けている。課題を把握し、地域の課題がどう学校に反映し、それにどう取り組むかという一点が抜けている。

事務局： ②「テーマ」のところで、課題解決に向けての取組の重点というふうに入れ込むことはできないか。

石川副委員長： 書く側が、そういうふうを意識するかどうか。

事務局： 課題解決に向けた取組を示す、ではいけないか。

石川副委員長： 申請書はできるだけ分かりやすくすべきで、採点者側の都合を優先するのは良くない。ところで、「学校の姿」を外した理由は何でしょう。

事務局： 外しているのではなく、それぞれ学校は学校の計画書、地域は地域の計画書で評価し、そこに現状把握や課題把握が出てくるので、それぞれの学校園の姿は読み取れると考えて、精査した。

石川副委員長： 地域の計画書に学校の課題は把握していなくていいのか。

事務局： 地域は校区全体を捉えるので、各学校園の課題を上げてくるのは難しい。

石川副委員長： 各コーディネーターが、学校園の課題を把握しなければならないということではないのだが、地域で決める学校予算、学校支援地域本部ですよね。

瀬渡委員： 学校や地域に評価の観点を含んだこの資料をそのまま渡すのか。

事務局： はい。

瀬渡委員： 今までもか。

事務局： 今までも渡しています。

瀬渡委員： 計画書の様式を示し、割と簡単な説明をしてあるが、私は毎回この項目には何が書かれていないと評価しているのですが、もっときっちりとかういう観点で取り組んでほしいということを、細かく計画書のところに書き込まないと落ちてしまうのではないか。それは作文の技術ではなく、この事業ではこういう観点で取り組んでほしいということを文章として細かく伝えていくと、それぞれ、それに沿って取り組まれるのではないか。地域の独自性があるので、こちらが提示しているものであまり細かく縛るというのではないが、評価の観点などを細かく示し、ガイドライン的なものを示していくべきではないか。

加藤委員長： 計画書を渡すときに、こことこの要素はこうつながり、こことこの要素は計画書を立案する際に必ず押さえてくださいと指摘することで、構造的に必要な最低限のものが計画書になるということですね。さて、評価の案はどうしましょう。私としては、3年の区切りで変えていくということで、大きな漏れ落ちがなければ、この案でやってみてもと考えるのですが。資料の⑤に関しては、我々にとっては、この項目・観点で何を見るかということで内容をもう少し詳しく2行ぐらいでまとめていただき、これまでの3年間からの変更の経緯も分かるように示してほしい。

石川副委員長： そもそもプレゼンをやりましょうといい出したのは私だが、国や市から予算を取って活動するには一定の責任感が生じる。主体的にやりたいことをプレゼンテーションし、それが認められれば伸びていくだろうし、またそうでないところもよそに刺激を受けるであろう、という提案だった。民間でもプレゼンテーションの場で見

いだされるということはあるわけで、そういったチャンスを与える場でもある。その意図は変えるべきではない。一方で、こどもの作文ではなく、ちゃんと評価観点も計画書に書かせるべきだということでこれまでやってきた。地域や学校の先生の負担は大きいと思う。これ以上のことはさせたくないと思っている。ひたすら評価することが主ではなく、これはこれでやりつつ、事業を通して地域・学校がどう変わってきたかを話さなければいけないと思っている。私は学校に対するキャリア教育のコーディネーターをしているので、学校がどう変わったかを見たい。学校が変わることと、地域が変わることは、卵と鶏の関係のようなものだが、この事業によって学校がどう変わったかを見たい。改善しなければいけないというのは委員長のおっしゃるようにそのとおりだと思う。しかし、「学校の姿」がどう変わったかを見ることは大切で、「学校の姿」あるいは「学校」というキーワードが大項目から抜けてしまうのは納得がいかない。学校は変わるということに関係者全員で確認したい。この変更では計画だけを評価していくことになっていくような気がする。

加藤委員長： 大きな問題ですね。

石川副委員長： よりによってという感じがする。

加藤委員長： この事業で「学校の姿」の変容を見ますか見ませんかという話になる。「学校の姿」は、この事業ではなくてもっとトータルに見ていただくところは教育委員会に当然ある。この事業でも学校はこう変わったという観点もあっていい。この事業で学校がいいふうに変わっていくというプラス評価で書ききれるところがどこかで落とせませんか。例えば、①「課題と分析」の中に、3観点を4観点にして入れ込めないか。「学校の姿」、「解決方法」を入れ込めないか。これは、今日決めなければならないか。

事務局： プレゼンテーション実施資料として、各協議会に示す必要があるのです。

岡田委員： 計画書は上がってきているのか。

事務局： 試算試案として作成いただいているところです。

岡田委員： その計画書は去年と同じものか。

事務局： 今お示したように、少し整理した様式で作成いただいています。

岡田委員： とすると評価の視点というのは我々の問題ということですね。作っていただく人には「学校の姿」の視点があろうがなかろうが、こちらがどう見るかということですね。

加藤委員長： 修正案として、①「課題と分析」の中に、3観点を4観点にして、「目指す子ども像」の下に学校がどういう姿になっていくかという観点を足しましょう。今まで②の「学校の姿」で見ていたものをそこに落とすしていく。一番大きいと思うので、①から⑤の順位性からいっても、①に入れた方がいい。「課題把握」の中の「学校の姿」に関わるものを別に、一つの観点として付け加える。

石川副委員長： 何が付け加わることによって、学校の姿が消えたかという、「評価の内容」と「評価の方法」が2つになったからだ。これは彼らが自分たちを評価できているかという意味の評価か。

事務局： そういう評価を自分たちでやっているかどうか。

石川副委員長： 内容は評価をしっかりとやれば伴うもので、評価方法と分ける必要はない。審査の観点として、自分たちの自己評価をちゃんとやっているかどうかを見なさいという教育委員会としての我々に対する視点の提起ということですね。普段の活動を見てきて、自己評価の視点がないと感じているのか。

事務局： 運営委員会をしっかりと開いているか、学校評価の中にも入れているか、また、協議会・運営委員会の中でもしっかりと自己評価・点検してほしいという思いで入れた。

石川副委員長： 評価というのは計画の一環にあるものだと考えている。正にPDCAサイクルを考えると、今回計画書の中から評価をわざわざ抜き出して、⑤の「公開と評価」という形で、大項目に追加したということですね。自己評価をさせるという観点を強くして、地域の問題を学校がどう捉え、それを学校がどう解決していくか、という観点を落とされたということですね。

瀬渡委員： 計画書の最後に、⑤の「公開と評価」が対応しているわけですね。計画書に、きちんと書かれるかどうか不安ですね。書かれないと評価が低くなります。

石川副委員長： ここだけで項目の5分の1を占めるわけですね。配点で考えると非常に高くなる。自己評価を大きな観点で持っていくのはどうか。

加藤委員長： そうすると修正するとすれば、⑤「公開と評価」の3つの観点の内「評価内容」をとってもいいということですか。

石川副委員長： 「評価の内容と方法」と一つにしてもいい。

加藤委員長： 「評価内容」として3つの観点にすると得点が低くなってしまう。では、修正の2つ目、⑤「公開と評価」の観点を2つにして、2つ目は、「評価の内容・方法」とします。確認です。⑤「公開と評価」の観点を2つにし、①「課題と分析」の観点を4つにして、4つ目に「学校の姿」を加える。学校の姿でいいのかな。

石川副委員長： 「学校の姿」というのは、地域の課題が学校の子ども像としてどう出てくるかということなので、①の「課題と分析」ではなく、「課題の反映」だ。以前は「テーマ」が「プラン」の一部として出てきていたが、今は「テーマ」自体が評価対象となっている。「テーマ」の中に「目標」があるのもおかしい。「テーマ」はキャッチコピーのようなもので、観点の一部だが、大きな項目にするのはどうか。それより「テーマ」がどう学校に反映するかが大事だ。「テーマ」は「プラン」の一部でいいのではないか。

加藤委員長： 「学校の姿」は資料⑤どこに入れたらいいのか。

石川副委員長： 変えるのですか。変えなくてもよいのではないか。

加藤委員長： 変えないですか。

石川副委員長： 変えるにはちょっと資料が不足している。

加藤委員長： では決めていこう。変えるか、変えないか。

石川副委員長： 評価するわれわれの問題ですから。

岡田委員： 資料⑥で次年度以降のことをもう少し詳しく検討ということであるならば、今年度は変えないままで、もう少し抜本的に評価の枠組みも含めてプレゼンテーションのあり方や、事業をどこに持っていかも含めて改めて議論する、ということでも

いい。時間はかかりましたけれども。

加藤委員長： 地域の人たちとの整合性はとれますか。我々としては、もう少し時間をかけて今後の問題として検討しようということだが。

事務局： 評価項目に関しては、前年度の分である程度対応はできるのかなと思います。見方を前後していかなければならないことは多いですが。今ご指摘いただいたように、「学校の姿」の「課題の反映」「解決方法」は抜けておりますので、前回と一緒の形で評価をして、今年度大きく変わった「重点的な取組」というところは評価しますよ、ということをごきっちり協議会に伝えていくことで説明はできる。「計画」であったり「プラン」であったりよく似た内容をもう少し整理していく必要があるのかなと思っています。

加藤委員長： 議事録にとどめてください。今年度は変えない。今回の議論は大変有益な議論でした。事業そのものをどういうふうに取り組んでいくかという根本の議論もあったと思いますので、次年度に向けてテーマ性を持って考えていく、委員長の課題だ、とこうしておいてください。延々議論して変えないということになりましたが、これはこれでいいことだと思います。大変重要な議論でした。

石川副委員長： プレゼンテーション5分というのは短いのではないか。

加藤委員長： 資料の⑤プレゼンテーションについて、昨年どおり各校区から説明を受ける、プレゼンは5分程度とし、という辺りご意見をお伺いしたい。

石川副委員長： 相当準備してこられますので、10分必要だと思う。委員に質問や相談があるのであれば、説明の時間を少し削って最初に相談したい旨を知らせてもらえばいい。ある程度聞いてあげるといふ時間はとらないといけないと思う。

加藤委員長： プレゼンする側の気持ちはそうでしょう。我々聞く側が覚悟するということですね。

石川副委員長： 去年までは10分ですね。それを半分にとというのが事務局の提案ですね。

瀬渡委員： 全体として15分というのは変わらないわけですね。

事務局： 全体で15分は変わりません。あとの意見交換の時間をたくさんとる。

岡田委員： 次年度以降のプレゼンテーションをどうするかという次の提案にも連動していると思うのですが、プレゼンテーションをしていただくというよりは、そこで評価者と実施者が高め合うような場になってもいいのではという印象は感じるのですが。

加藤委員長： プレゼンは10分程度でいいですか。

岡田委員： 早く議論したいところは時間を短くする。そうは言っても、10分と設定すれば10分話されると思いますが。

加藤委員長： プレゼンテーションの時間が短いということが根本なので、10分としましょう。

3 4年間の事業総括について

- ・事務局説明（3月の評価会議に向けて総括資料をまとめるための意見を伺いたい。）

石川副委員長： 仕事柄文科省が主催する全国のコーディネーターが集まる支援本部の全国大会にずっと行脚しています。何度も言っているのですが、奈良ほどのシステムを持った市町村はないです。教育委員会の先生方はいい話があるはずないと思ひ、悪いところばかり見てしまうのかもしれませんが、リーダー的なコーディネーターの資質は

非常に高い。これは地域で決める学校予算事業が持ち上げてきたものだと思うので、総括にも彼らの意見を聞いたらいいいのではないかと考える。それくらいのレベルには達しているコーディネーターが少なくとも20人ぐらいいる。各中学校区の代表コーディネーターのほとんどが、ここに入っても、決して地域の要望のみを突き付けるような人たちはいないと思う。総括の観点に関しても、一度代表コーディネーターを集めて、意見交換する場を持ってもいいのかなと思う。彼らから見てこの4年間はどうかだったのか、地域で決める学校予算という取組がどうであったのか、地域の意識の変化はどうかであったのか、意見を聞いてみたい。行政でできないことを自分たちでやると発言する人もいる。そういう人たちと行政が意見交換をして互いに評価するというのはとても大事だ。できればそういう場を設定したうえでの事業の総括をしていただきたいという希望だ。

加藤委員長： 可能なら事業の質の向上に絶対役立つことだ。来てくださったコーディネーターの方も、考えを深めることが絶対あるはずだ。その場はあってもいいと思う。考えてもらいましょう。ご意見を事務局の方に出してください。その他ありますか。

4 その他

- ・事務局説明（2月1日実施の「交流の集い」の説明）

加藤委員長： 今日はこれで終わりますが、なかなかいい議論ができたと思っております。どうもありがとうございました。

事務局： 次回の評価会議（プレゼンテーション）の日程調整について。2月20日（木）に決定。

閉会

平成 年 月 日

署名委員

署名委員
